

時の養成所

岡本俊弥

いつも、風が吹き付ける高台だった。

深い溪谷の奥にある城塞には、季節を問わず風が絶えることはない。

ただ、朝夕のある時間帯だけ、風が凪ぐ瞬間がある。すると、城塞に囲まれた邑のあちこちから、薄らと立ち上る煙が見える。研修生たちが思い思いに何かを焼いているのだろう。ふだん許可されない行為だったが、たまには息抜きも必要だ。

ジェイは擁壁の上に立ち、幾筋かの煙の行方を追う。

「穏やかだな」

「穏やかだ、もめごとなど何もない」

少し離れたところでレイが呟くように言った。

厳めしく城塞と呼ばれているが、もはや外敵に備えたものではない。土砂に埋もれていた戦争の遺構なのだ。学習で知ったことだが、彼らにはあまり馴染みのない概念だった。

今の城塞には、機構が設けた養成施設が置かれている。

ジェイは施設の主任教官だった。

彼らもまた、この施設で学んだ。出身者全体で見ると、そういう例は多くはないが、少なくとも教官たちは皆そうだった。他にヒトのための教育施設はない。教官に任じられたのなら任地はここしかない。

卒業後の配属先を聞かされたとき、ジェイは半ば安堵し半ば落胆した。施設での仕事は、しよせん予測の範囲だった。未知のものはない。

施設を創立したのはジェイたちとは違う。正確な年代は分からないが、彼らの何代も前のどこかで機構が建設したものだ。城塞自体は、さらに古くからあったのだろう。

しかし、施設の歴史などは教習に含まれない。今では、風化した石組みに手をやり、過ぎた歳月を思いやるほかはずなかつた。

「いまのうちに楽しんでおけばいい。ここを出たあとは楽しやないからな。理不尽な仕事が続いている」

煙に手を振って、レイは言う。

「機構の規約に従うのなら、すべての事象は公正であるべきだ」

またその話をするのか、とジェイは暗い気分になる。

厳密に言うなら、機構には明文化された規約などない。一方的に役割が定められ、その都度指示が下りてくる。官吏はただ従うだけだ。

とはいえ、レイの愚痴に付き合うのも、自分の職務の一環なのだと思うようになって。教官にもはけ口は必要だ。

「公正というのは、どの事象も均等という意味にすぎない。もともとヒトには矛盾した任務なのだ」

「矛盾はどうか。最初から卑下するのはな」

「卑下の問題じゃないだろう。単純に確率の問題だと考えてみる。機構が管轄する領域は広い。それに対して、ヒトが管理する範囲は狭い。狭い分、責任の比重が上がる

のはやむを得ないのだ」

*

気が付くと、養成所の寮の手続きをしていた。

何をしているのかは分かっている。どうやってきたのかもだ。係員との受け答えもためらいはない。なのに、ミリは夢の中にいるようだった。現実感がまるでない。

ずっと前からこうなると知っていた。だから、不安に思うことなど、あるはずがなかった。

そうなのか、ほんとうに。ずっと前って、いつのことだ。

寮の個室で荷解きをしていると、来訪者を告げるチャイムが鳴った。

ミリの体を包み込める、怖いほど大柄な男が立っていた。

「きみの教官を務めることになるジェイだ。卒業までの付き合いだ、よろしく頼む」
姿勢を正すミリに対して、その眼は優しそうで微笑みを浮かべていた。

研修生は季節を問わず、施設へと送られてくる。卒業時期は不定期で、研修生の成績によって異なる。人が出ていくたびに、また補填される。ジェイは簡単に説明してくれた。

「きみには同期の仲間はいないが、研修生ならだれでもすぐに打ち解けてくれるだろう。物怖じせずに遠慮なく話をすればいい」

それはほんとうだった。同じ出自でなくても、男女や年齢さえ混在する研修生で、ミリを邪険に扱うものはいなかった。

入所してから数週間は、適応のための訓練に充てられる。研修生によっては、慣れるまで数ヶ月もかかる場合があるようだった。以前の暮らしとのギャップが大きすぎるからだ。

最初に教えられたのは記憶の仕組みだった。

研修生には、この世界の基本的な知識が予めインプリントされているという。しかし、過去の記憶も残されている。

「はじめは違和感を覚える。覚えのない記憶があるというのは気味が悪いだろう。そ

のうち慣れていく。矛盾を承知の上で二つの異文化を掌握できなければ、研修後の事に差し支える。いまは気にしないことだ」

教官の言葉の意味は分かる。

ふとした時に、自分が生きていたのはここではない、夢の中、にせものの記憶だと感じてしまうのだ。城跡にある施設や、教官や研修生の仲間や、そのすべてが。

「きみは恵まれている。この生活と過去とは、そんなに大きく違わないはずだ。まだ理解できないだろうが、他の研修生よりもはるかに有利なのだよ」

研修生は誰もが冷静に見える。人為的とはいえ、自分が何のためにいるのかをあらかじめ理解しているからだ。しかし、深く抑え込まれているからそう見えるだけで、不安を奥底に隠している者も多いのではないか。

「だいじょうぶだ。正常な反応だ、それでいい」

教官も、かつては記憶の違和感に苦しんだと言った。

頷きはしたが、感情的には納得できないのだ。だが、それ以上不安を訴えはしなかった。自己抑制能力を試されているようだった。

季節は春になった。

谷には無数の花が咲き乱れ、木々もまた一時の花を咲かせていた。谷の冬は長く、短い春ともなれば何もかもが芽吹くのだ。

どうやってここに来たのか。

基礎研修を終えた頃、ミリは二つの記憶の塊の間に、空白があると気が付く。

生まれ故郷で生活していたころ、一転して、施設へと移動した記憶。この間はどうかっているのだろう。

「余計な心的負担をかけないために、記憶の一部は消去されている。空白には意味があるのだ。しかし、本人の希望があれば、教官の判断で開示することもできる」

ぜひ聞きたい。

「ただ、開示はあくまでも言葉だけにすぎない。記憶が戻るわけではない。その点は理解してくれ」

ジェイ教官はこんな話を始める。

「空白の前、なにを憶えている」

「にぎやかな街の中で、両親と三人で暮らしていました。わたしは働いていて、毎朝自宅を出ると、大きな箱のような車に乗って、どこか集合地点に集まり、そこからもっと大きな車で勤務先まで移動する、そんな生活でした。忙しく、騒がしく、小さな変化はあっても、毎日ほ繰り返して」

具体的に何をしてしていたのか、詳細はぼやけている。つい最近のはずなのに、子どものころの記憶のようだった。季節の移ろいがある。こことは違う四季が、春が来て、暑い夏や秋が過ぎ、冬には雪が降る四季が繰り返されて。

「そのあとは空白なのか」

「ええ。途切れます」

「徴発されたとき、きみが回収されたとき、正確には、五単位分の記憶消去が行われた。つまり当時の五年だ」

「……」

「その五年の間に、きみが住んでいた地域に不和の兆しが芽生え、膨らみ、騒乱を招く。騒乱はより大きな騒乱を呼び込み、やがて始まりのない戦争になる」

「そんなこと……兆候もなかったのに」

「兆候というのは、大半の人には見えない。きみも同様だったろう。いつのまにか火種がついて、知らないうちに火事になる。火事は手をこまねいていると大火になり、もう消し止められなくなる。残念ながら、そういうものだ」

「わたしは……」

「居住地一帯が騒乱から火災になり、包囲網が解けない中で多くの死者が出た」

「わたしは、逃げたのですか」

「逃げられたのなら、ここにはいない」

「……では、死んだのですか」

「そうだ」

「家族はどうなったのでしょうか」

「たくさんの住人が死んだ。詳細は分からないが、おそらく亡くなっている」

研修生は自分が死者であったことを忘れている、とジェイは言った。

養成所に入所する前に、古い記憶は死者から吸い出され、新たな記憶と共に再生さ

れた身体に書き込まれる。

「候補のヒトを確保するのは、機構の中にある徴発グループの役割だ。環境への影響を最小限とするため、徴発は自然災害や戦乱が対象になる。生存者は対象外だ。必然的に死者になる」

「なぜ、わたしだけが」

「どんな理由で回収するのは答えられない。きみが徴発チームに配属されるのなら、その時点で分かるだろう」

ミリは途方に暮れた顔をする。

「それはいつたい、いつごろ起こったことなんですか。ここからわたしの街まで、どのくらい離れているのですか」

「ここにいる限り、絶対的な距離とか時間とかは、あまり意味はないのだ。物理的な距離を移動したとしても、そこには何も残っていないだろう。時間的には、事象からおよそ二〇万単位離れている」

「二〇万、ですか……実感できません」

「二〇万は、機構の中ではとても小さなギャップだ。だが、ヒトにとっては大きいだろう。ここはもう、別の世界だと思った方がいい。きみはいま別の人生を送っている」

一瞬表情を変えただけで、ミリは逆に落ち着いた。

入所前といまの間には大きな谷がある。過去の生活と刷り込まれた新たな記憶、この断層を隔てる空白を、想像で埋めることはできない。

だとすれば、忘れるしかない。

ミリは研修課題を黙々とこなす。一度割り切ってしまうと、過去に対するわだかまりは薄れていった。ミリには柔軟な洞察力があると評価された。

「機構を設立したファウンダーは遠い未来に生まれる」

ジェイは立体的な棒状の模式図を示しながら、淡々と語る。

「およそ五〇〇〇万単位の未来だとされる」

ミリは、少し眉をあげて返した。

「……それは、正確なのでしょうか」

「残念ながら我々に検証することはできないが、機構があえて虚偽を語る意味もない

だろう。これほど未来となると、絶対的な数字はどうでもよくなる。知りようもない新たな世界だ」

「ファウンダーはヒトなのですか。どんな姿をしているのでしょうか」

「きみが直接会う機会はない。気にしないことだ」

「どんな文明なのでしょうか」

「ファウンダーの社会がどんなものかは、われわれの知識では解き明かせない。われわれの社会とどう違うのかも分からないし、われわれが積極的に知ることも推奨されていない。養成所は何かを研究する機関とは違う。個人的な好奇心は、業務の範囲にとどめるべきなのだ」

「何も分からないまま、黙って従うのは……」

「きみを死から助け出してくれたのはファウンダーなのだ。われわれの使命は、彼らに従うことで始まる。自身のいまの生を否定しないことが重要だ」

「……ファウンダーは、時間を移動する手段も作り出したのですね」

「時間を移動する手段と、同時に時間を管理する手段を造り上げた。管理範囲は、三

億単位過去から、五〇〇〇万単位未来にまで点在する」

ジェイは空間にさらに模式図を描いた。四角く区切られた領域が、輝度をあげて浮かび上がる。

「この枠が管理範囲なのですね。どういう意味の範囲なのですか」

「ある閾値で決められる範囲だ」

「閾値、ですか」

「ファウンダーは時間を管理するために、まず知性の存在有無を調査した。そのために、知性を判定するための評価関数が作られた。ある一定以上の数値、閾値を越えれば、知的生命が存在するとみなされる」

「点在というのは」

ジェイは、ばらばらに輝く領域を指す。

「連続していないという意味だ。範囲がある。知的生命であっても無限には生きられない。それぞれが〈窓〉の中で生まれ、滅びる。知的生命が存在した時間的な範囲が〈窓〉なのだ。この惑星の歴史の中に存在した、複数の〈窓〉をファウンダーが抽出

「したのだ」

「たくさんありますね。こんなにたくさん知性があるなんて意外でした。ヒトだけが知性を持っていると思っていました。未来はともかく、過去にまである。でもなぜ、知性の存在と時間の管理がかかわるのですか」

「ファウンダーは、各ローカル時空間に存在する知性に、時間の管理を委ねるといって考え方をします。この養成所の目的もそうだ。ヒトはヒトの生きた時間を管理する」

「ほかの知的生命と、出会う機会はあるのですか」

「ない。ヒトが別の知性の住む〈窓〉に送られることはない」

「なぜ、ないのでしょ」

「異なる〈窓〉間では共通点が少ない。異質な知性同士が相容れることはない、ファウンダーは考えているからだ。お互いが干渉し合い、争いを招く」

「どうして、そんな限界があるのか。」

「途方もないと思っていた自分たちの仕事で、ミリは、初めて壁を見たような気がした。」

*

卒業を危ぶんだジェイも、ミリには期待を感じるようになった。

彼女の出自には、傲慢な者が多い。他の研修生と打ち解けず、教官の指示にすら従わない場合がある。独善的で、官吏の目的と相いれないのだ。残念ながら、正規の任地に派遣されずに終わるものもある。不適格者は、時の管理を担えない。

「文明は、必然では生まれないことに注意しなければならない」

ジェイは講義で、ミリにこう説明する。

「一定のキャパシティを持つ生命であれば、ある条件下で文明化のきっかけを得る。道具を作る、火を熾す、衣服や住居をつくるなどする。それが、やがて文明になるのだが、きっかけが伝播せずに、途絶えてしまうこともある。すべては偶然だ」

「まるで文明があることが、偶然みたいに聞こえます」

「知性があっても、文明に至らないケースが多いのだ」

「すると、〈窓〉に含まれる知的生命でも、文明を持たない場合がある」

「そう、文明は貴重だ。しかし、裏腹な一面がある」

ジェイは養成所の教室を見渡す。

部屋の中央にミリが座り、教材を動かす制御卓にジェイが着く。

「時間は揺らぎやすい、という誤解を招くかもしれない。時間の中で生きる生命活動が移ろいやすいのだ。そういう不安定な時間を管理するために、ファウンダーは規範線を設けた」

講義は、ほぼ一対一で行われる。研修生はそれぞれの個性に合わせて訓練される。出自も年齢も一定ではないから、一律の授業は困難だった。

「規範線は、五〇〇〇万年未来から過去に遡りながら建設された。本体は時間を記録する装置である。すべてを記録すると膨大なデータ量となるから、量子的に差分圧縮されている。時間の揺らぎが生じると、過去に旅行したものは元の世界に帰還できない。規範線は、戻るための里程標のようなものなのだ」

「つまり、目印ですね」

「目印だが、その目印と同時刻の事象とが一致する必要がある。不一致となる事象が揺らぎだ」

「不一致の発生を検出するのですか」

「不一致が生じたあとでは遅い。起こる前の兆候段階で補正する。揺らぎの抑制とはそういう意味だ。都度補正する介入が必要になる」

「揺らいだら、規範線はどうなるのですか」

「未来が別のものになると、始点から続く規範線そのものが切断される。機構が成立するまで、過去に向かった旅行者は誰も戻れなかった。もともと不安定な時間を移動すれば、すべてが一方通行、不可逆となるのは当然なのだ」

「揺らぎを補正すると仰いましたね。人為的に直すことなんてできるのでしょうか、自然現象もあるでしょう」

「純粹な自然現象の制御には、膨大なエネルギーを要する。しかし、物理的に因果関係のあるものが、揺らぐ可能性は大きくはない。むしろ、生命由来の揺らぎが問題になる。特に知的生命の活動こそ、人為的に補正すべきなのだ」

「だから、知的生命の活動する〈窓〉が対象になると」

「そうだ。規範線は三億単位の過去に終点があり、五〇〇〇万単位後に始点がある。その規範とは、一度だけ記録された事象の集合体だ。機構は常に記録に対する変動を計算し、補正内容を詳細に指示してくる」

「記録はどのように選択されたのでしょうか」

「選択はされていない。記録装置が作動した瞬間が記録なのだから」

「だとすると、規範というのは、たまたま記録されたもの、単なる偶然に基づいているのですね。何の理由もないものでしょう」

「何の理由もない。だからこそ公正といえる」

「……」

*

街路に降り立つ。

何も変わりが無いようだった。

人々が忙しく行き交い、車道では、自動運搬車が最小限の車間を開けて走りすぎていく。

ここはどこだろう。

ミリは文字の書かれた標識を見つけ、位置を確認する。

どこだろうと関係ない。指示に従えばいいのだ。

目標地点は、歩道沿いにある。歩行者の流れに乗り、しばらく歩くと建物が途切れ、公園に面した広場が現れる。木々の向こうにシテイホールがある。通行人の多くは、その建物に歩いているようだった。

若い男女が中心だ。一人だったり、数人で連れ立つ彼らは、いかにも楽しげに見えた。コンサートでもあるのか、建物の周辺は入場を待つ群衆で埋まっていた。

ミリは正面ゲートを通り過ぎて、通用門に向かう。

門には警備員が立ち、人の出入りはない。もう、コンサート関係者は入場済みなのだ。

そこに、小型のバスが接近する。黒いつなぎ服を着た男たちが乗っている。正面側にいた人々とは対照的な服装だった。

さらにその後方には、警察の警備車両が見えた。

ミリは車道に走り出る。大きく手を振って、警察の注意を引く。車両の窓が開き、何をしているのかと大声で詰問される。ミリはバスを指さす。

銃を持っている。たくさんの銃がみえた。

警察車両は、たまたま通過中だった。ミリが介入しなければ、バスの男たちは当初の計画通りホールを占拠し、人質を取っただけかもしれない。その方が、結果的に犠牲者は少なかったろう。

しかし、警察がバスを止めようとしたことから、銃撃戦がはじまる。警官数人が撃たれて倒れる。男たちはバスから出ると、正面側に向かって走る。群衆は銃声を聞いて恐慌状態になっている。進路を妨げられると、男たちは無差別に銃撃を始める。自動小銃の斉射で、数百人の死傷者が発生する。銃撃犯が全員撃ち殺されるまでに、広場は負傷者の血に染まる。

規範線によれば、もともとこうだったのだ。

ミリが介入しなければ、正しい規範は守られなかった。

規範線は、すべての時間を輪切りにして記録する。小さな逸脱事象は無数に生じるが、規範線を毀損する揺らぎでなければ見逃される。対象か、そうでないかは事象の大きさには比例しない。ただ、人為的な重大事故の消滅が看過されることはないようだった。事故の発生は、規範の上で保障されるのだ。

大災害が保障される、例えば回避手段があったとしても。

降りた時から、ここが記憶の空白がある五年間のどこかだと気が付いた。ミリたちが暮らしていた地方都市ではなく、なじみのない首都圏だった。ただ、地名や街路の名前、繁華街のありさまは、どこかに憶えがあった。つまり、ここには過去のミリもいるのだ。

ミリは首都圏の駐在施設で待機する。記憶にあった過去の生活と何ら変わりはない。介入の指示は不特定に入る。数人のチームを組むことはあったが、それぞれの役割はあらかじめ決められていた。

指令は、どれも紛争を拡大する方向のものだった。次々と片付けているうちに、ミリは機構の存在に疑問を感じるようになる。機構が守っている規範線とは、結局五〇〇〇万単位後と過去とをつなぐ、単なる通路に過ぎない。通り道なのだ。その道の下に何があるうとも、一顧だにされない。おそらくヒトですらない存在が、上を通り抜けるだけなのだ。

表立って感情をみせないまま、ミリは好成績で任務を遂行する。ただ疑念が消えることはなかった。

守る価値があるのか。

こんなものを守るべきなのか。犠牲者の死すべき運命なんてあるのか、分かっているのなら助けなくていいのか。

*

ヒトに割り当てられた〈窓〉には一〇〇〇万単位の幅がある。そこには複数の出自の

ヒトがいた。

ジェイは金髪碧眼だが、髪や眼の色などは、居住地域によって変わる。眉の上に特徴的な高い隆起があり、彫りの深い顔立ちをしている。レイは、顔こそジェイと似ているものの、その胸もとまでしか身長がない。上背が中間のミリたちは、平板で下顎が目立つ顔をしていた。すべては、一五〇万単位前に分岐し、個別に進化したヒトの一族だった。見慣れてしまえば、外観にさほどの違和感はないだろう。

文明と呼べるほどの社会を築いたのはミリの一族だけだが、他のヒトにも同等の知性は検出された。文明の有無は単なる偶然だ。ファウンダーはすべてのヒトに官吏となる知識を授け、この養成所を設立する。強化された知識は、ミリたちの文明をモデルにした。管理対象の大半が、そこにあるからでもあった。

だから、ヒトには何系統もの出自がある。わずかに混じり合うことはあっても、並行独立した別々のヒトなのだ。どれが進化しているとはいえない。

養成所に、また冬がきた。

谷に雪は降らない。風は冷たいが、ひどく乾いている。湿り気を帯びるのは、春先

だけだった。

ジェイは、一年前に研修を終えたミリの消息を聞いた。

「もともと、彼らには無理だったのではないか……」

レイがつぶやく。

「……事故が多すぎる」

「残念だ。負担が大きな領域でもある。数が多ければ、事故の件数も増えてしまう」

「数か。当事者に管理させる無理もある」

「代替できればいいのだが、〈窓〉の末期ではわれわれは関われない」

官吏となったヒトは、出自の社会に送られる。その成員となって、揺らぎの監視をするために。養成所とは全く環境が異なるが、訓練を受けた官吏なら順応できる。しかし、ミリたちの一族は数が問題だった。一〇〇万単位の間で生きた、他のすべてのヒトを集めたより何倍も多い。

ミリは行方不明になった。

時間管理者である機構の官吏が行方不明になる。故意ではなく事故だとしても、一

度規範線を見失うと、元の時間には戻れず救助も来ない。再び死んだのと変わりがないのだ。

ミリの派遣された時間域では、複雑な揺らぎが生じる。現地に投入される官吏の数も常に多い。ヒトで溢れかえった世界だ。ヒトこそが揺らぎの原因なのだった。

ジェイは、ファウンダーと会話をした。

研修生には、ファウンダーと直接会えることは話していない。話せるのは、教官の中でも限られたメンバーだけだった。

「ミリは何をしたのですか」

ジェイは連絡室の中で、ファウンダーと向き合う。彼らにはヒトのような名前はない。機械を介して話す。

「自身が関係する事象に干渉し、逸脱を起こしたのです。言うまでもなく、指示のない介入を実行する権限は、現地官吏にはありません」

ファウンダーは流暢にしゃべり続ける。

「こういうことを行っても、何かが好転する可能性はないのです。われらの技術をも

ってしても、時間線を自在に改変するなどできません。彼らが思い付きで改変を試みれば、でたらめな結果しかもたらさない。教育は十分受けたはずなのに、本質を理解していない。とても残念なことです」

「時間線はどうなったのでしょうか」

不適切な介入で官吏が失われると、さらに前兆が遡行的に発生する。新たな官吏は修復のための介入を行う。規範線との差異が収束するまで、何度でも実施される。その回数分だけ、官吏は消耗する。時間線の揺らぎは不確定で、どこで起こるのかも分からない。最近は消耗率が高くなっているようだった。

「逸脱の結果は不可知です、観測できないのです。基本的な知識ではないですか、規範線以外の時間は存在しないのと等価なのです」

ファウンダーは原則論で説明を拒む。

本当は分かっているのではないのか、ジェイは疑念を抱く。

けれど、ファウンダーの表情は何度経験しても読み取れない。真っ黒な瞳に知性は感じるが、何を考えているのか得体が知れない。細長い大きな頭骨、面長の顔、長い

鼻と小さな耳。

「余計な質問でした、申し訳ありません」

「仕方がありませんね。結局、失敗が多いと分かっているけど、彼らにやらせるしかない。あなたが担当できれば、もっと良かったでしょうに」

「仮定の話をされても」

「もっとも、あなたの方のように、戦いを好まない性格だと異なった未来になっていたでしょう」

ジェイは出自の一族を調べたことがある。大量殺戮をした記録はない。テリトリーを奪い合う小競り合いまでだったろう。文明まで至らないまま、何千年なのか何万年かをかけて、ジェイやレイたちは静かに滅んだ。競争相手のいなくなった世界では、適応放散したミリの種族が恐ろしい勢いで殖えていった。ジェイたちが残っていれば、人口もバランスし、平和的な共存が図れたのだろうか。しかし、もしそうならこの養成所もない。

ファウンダーはかつてこんな説明をした。

生命は三億単位前からこれまで、およそ十二回の大絶滅を経験してきた。そのたびに、六割から九割の生物種が減び、地上や海は空っぽになった。原因はいくつかある。大規模な火山活動と気象変動、大きな隕石の衝突などの天体現象が半々を占める。天変地異はどれも避けがたい。そのたびに生物や生態系はリセットされる。覇権を握った生き物も一瞬で消し去られる。

「ただ、唯一、生物由来の大絶滅があるのです。それが、地表を炎の海に変えた絶滅戦争と呼ばれるものです。自然現象をとまなわなないものの、地表を蔽い隠す放射線の雲には同様の破壊力がありました。お分かりのように、ヒトが引き起こしたもののなのです」

二〇万単位後のいま、植物や昆虫類を除けば、まだ動物は谷に帰ってこない。ただ地上のどこかで、生き残った小動物が活動しているはずだった。

ファウンダーの作った機構が、世界を破滅させたヒトを再生し、ヒトを管理する養成施設を作ったのは皮肉に聞こえる。

「いいですか、あなた方はこの絶滅戦争を守るために存在しているのです。規範線は

時間逆行を維持する要ですが、これが目的ではありません。なぜなら、われらが生まれるためのトリガとして、大絶滅こそが必要だからです。ほとんどの生命が減んだあとに、われらの祖先になる小さな哺乳動物が生き残る。敵の存在しない地表を征服し、さまざまな形態に進化しながら、やがてわれらを生み出すのです。絶滅戦争からは、大いなる時間がかかりました。けれど、戦争はわれらを生み出した賜物なのです。ヒト由来の最終戦争がなければ、われらもない。戦争を消滅させないことが、われら機構最大の使命なのです。あなた方は自らの過ちで滅びた存在です。それが罪を問われず、使命のために働けるのですから、幸運だと思わなければなりません」

規範線に沿って、いくつも〈窓〉はある。だが、多くの窓は監視の対象ですらない。本当に重要なのは養成所が管轄する〈窓〉だ。ヒトを滅ぼすため、正確にはヒトが滅びるのを妨げないための官吏養成所なのだ。

人類が減びたあと、一〇〇〇万の不毛の時代を経て、生命は復活し、地と海に満ちる。新たな知性種が生まれるまで、さらに四〇〇〇〇万単位が必要だった。膨大な無駄だ、いや必要な無駄か。

そうだ、ファウンダーの祖先ならジエイも見たことがある。

野原を走る、片手で隠れてしまうくらいの小さな動物、鼻面が長く尻尾の長い生き物、何でも齧りとる狂暴な牙。